

幼小中一貫校における通教科的能力を位置づけた国語科の 学習開発

—仲間とともに課題解決に向けて学習を進め、言語感覚を豊かにし、自分の生き方について考える子どもの育成—

杉川 千草 君岡 智央 湊山 真悟 西木 英里
石川 嘉一 山元 隆春 田中 宏幸 佐々木 勇
小西いずみ

1. はじめに

平成28年度中に次期学習指導要領・幼稚園教育要領の答申・告示が予定されている。その後、幼稚園は平成30年度、小学校は平成32年度、中学校は平成33年度に全面実施されると予想されている。

この指導要領・教育要領の在り方について、中央教育審議会教育課程企画特別部会における議事をまとめた「論点整理」においては、各教科等の教育目標・内容を中心にした現行の指導要領から、「資質・能力」を重視したものへと見直しが行われることが読み取れる。また、「育成すべき資質・能力については、幼児教育から高等学校までを通じた見通しを持って、各学校段階の教育課程全体及び各教科等においてどのように伸ばしていくのかということが、系統的に示されなければならない」とも述べられている。このように、育成すべき資質・能力を明らかにし、またそれを系統的に示していくことが今後必要とされることが言えるのである¹⁾。

さて、本学校園で行われている新領域「希望（のぞみ）」では、社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成をめざして、「キャリアプランニング能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」を育もうとしている。これらの能力は、通教科的能力として、各教科の学習で育みたい資質・能力と大きく関連するものである。

本校国語部会では、これらの通教科的能力を

「語彙力、言語生活の向上を志す意欲・態度」「コミュニケーション能力の基盤を成す国語の運用能力」「論理的思考力・想像力の基盤を成す国語の運用能力」ととらえ、より確かな国語科の学力を育てていきたいと考えている。

2. 研究の目的・方法

本研究は、幼小中一貫校としての特色を生かして、通教科的能力を位置づけた国語科の学習開発を行うことによって、新領域「希望（のぞみ）」との関連を明らかにすることを目的としている。

本年度は、幼稚園における言葉の育ちを見とり、小学校での国語科の授業に生かすことによって、幼小期の通教科的能力の育成のあり方について検討し、幼小中12年間を見通した通教科的能力の育成につなげていく。

3. 実践1—2年「おはなしをしょうかいしよう」 （「スイミー」レオ＝レオニ作

—学校図書2年上）

（1）授業の構想

①単元について

子どもたちが本のおもしろさを感じることができるよう授業を構成する。

ここで用いる「スイミー」は、主人公の行動の順序、時間の順序で進むわかりやすさをもっている。また接続詞、体言止め、倒置法が効果的に使われていることで劇的な印象を与え、読

むものを作品の世界に引き込む力も持っている。スイミーが困難を知恵と勇気で乗り越えたヒーローのように映り、子どもたちにとって大好きな作品の一つとなると考える。

スイミーは「力を合わせる大切さ」「喪失感からの回復・困難を乗り越えた自立」「人には個性がある（自己発見・自己実現）」など、読み手にたくさんのメッセージを与えている。

スイミーの主題をどうとらえるかによって、物語の解釈が変わり、個々の読みでは気づくことのできない読みの解釈にも出会うことができるようになる。

②幼稚園児と中学生の読みの実態から

小学2年生の授業構想を立てるにあたり、子どもたちの発達段階によって「スイミー」の読みの解釈がどのように変化していくのかを調査することとした。

年長児は、大型絵本（好学社）を使って読み聞かせをした²⁾。その後、「お話を聞いてどう思ったか。」と聞くと、以下のような反応が返ってきた。

- ・小さい魚が大きい魚になったところが、おもしろかった。
- ・赤い魚たちが食べられてかわいそうだった。
- ・にじいろのくらはげは、全体がレインボーですごくおもしろかった。
- ・みんな赤なのに、どうしてスイミーだけ黒なの？
- ・こんぶは小さくてぎざぎざしているのに、大きくてぎざぎざしているのが、なんでなのかなと思った。
- ・黒い魚が、小さいのにいいことを思いついたからすごいと思った。
- ・でかいところがおもしろかった。



図1 「スイミー」の読み聞かせ

これらの反応から、年長児は「スイミーのかしこさ」に気づけること、スイミーの体の色に着目できることが分かった。

中学2年生は、読み聞かせの後、「どんなお話か」をまとめさせた。そこで出てきたキーワードをもとに、生徒の考えを以下のように分類した。

- ・協力することの大切さ（14名）
- ・短所を長所に変える（10名）
- ・優しさ（3名）
- ・自立，成長（3名）
- ・かしこさ（4名）
- ・弱肉強食（2名）
- ・キーワードなし，あらすじのみ（2名）

中学2年生になると、「協力することの大切さ」「短所を長所に変える」というキーワードが多く出てきた。

また、お話の終わり方に違和感を覚え、その先を予想したり、作者の意図について考えたりする生徒がいた。小学2年生の時に読んだ印象との違いを感じ、改めて読むことの良さを書く生徒もおり、様々な視点をもって作品をとらえていることが分かった。以下は生徒の記述である。

- ・もう少し話を続けたら面白い。けれどそこで話を終えたのには理由があったのだと思う。
- ・「スイミー」についてここまで深く考えたのは初めて。どんな話も深く考えると面白いことが必ずある。そう思った。

③指導にあたって

子どもたちが作品をよりよく読もうとすることで、ひいては自分の生き方についても考えることができるように、個々では気づくことのできない読みの解釈に出会わせようと考えた。

今回は、「スイミーのすごさは短所を長所に変えること」を、小学2年生の授業での「個々では気づくことのできない読みの解釈」に設定した。これは、多くの中学2年生が自力で見出している読みの解釈であり、年長児も「体の色」に着目できていることから、小学2年生が学習する上で無理のないものであると判断したためである。

「スイミー」は教科書会社によって、文章が異なる箇所がある。学校図書の教科書に載せられているものは、谷川俊太郎の絵本（好学社）の訳に忠実なもので、他社のものの中には、教科書用に変更が加えられたものがある。

学校図書の教科書
みんな赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりもまっ黒、でもおよぐのはだれよりもはやかった。
他社の教科書
みんな赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりもまっ黒。およぐのは、だれよりもはやかった。

授業では、この「みんな赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりもまっ黒、でもおよぐのはだれよりもはやかった。」という一文の「でも」に着目させる。このことで「まっ黒な体であること」と「泳ぐのが速いこと」は逆接でつながれ、「まっ黒な体であること」はスイミーにとって喜ばしいことではないこと（短所）をおさえられる。その後「ぼくが、目になろう。」と言ったスイミーの気持ちに寄り添わせることで、自分の短所を長所（個性）に変えたことに気づかせることができると考える。接続詞の学習は、「そして」と「でも」に絞って事前に行うこととした。

④目標

○ 一つの作品を読み深めることで本のおもしろさを感じ、よりよく読もうとすることができるようにする。

⑤学習計画（7時間）

第1次 スイミーのすごさとは …… 2時間
 第2次 スイミーのすごさを再発見 …… 2時間
 第3次 レオ＝レオニの本を読む …… 3時間

（2）授業の実際

〈第1次 スイミーのすごさとは〉

小学2年生にも年長児や中学2年生と同様に、初めに読み聞かせを行った。その後、初発の感想として、スイミーのすごさについて書かせた。子どもが書いたスイミーのすごさは以下のような内容であった。（全32名）

<ul style="list-style-type: none"> ・かしこい。（12名） ・あきらめなかったのがすごい。（5名） ・速く泳げるのがすごい。（5名） ・みんなと協力するのがすごい。（5名） ・たくさん考えたのがすごい。（1名） ・「ぼくが、目になろう。」と言ったのがすごい。（1名）※短所を長所に変えたという根拠ではなかった。 ・無回答（3名）
--

多くの子どもが、年長児と同じくスイミーが

大きな魚のふりをして泳ぐというアイデアを出したかしこさをすごいと感じていた。しかし、今回「個々では気づくことのできない読みの解釈」として設定した「スイミーのすごさは短所を長所に変えたこと」について、読み取っている子どもはいなかった。

〈第2次 スイミーのすごさを再発見〉

初読の感想をもとに、「速く泳げることをすごいと挙げている人が多くいたが、体が黒いことはすごいことではないのか。」と問いかけると次のような話し合いとなった。

P 1	すごいことです。だって本物の魚になるためには黒い目が必要だから。
P 2	すごいことではないんじゃない？自分が一人だけ黒でみんなと違ったら嫌だ。
P 3	みんなと一緒にだと普通で、違うからすごいんじゃない？
P 4	みんな違ってみんないい。
全体	たしかに。
T	お話の中の言葉で分かるころはないかな。
※	子どもたちだけで気づくことが難しかったために、着目すべき一文を教師が範読し、「でも」の部分強調した。
P 5	「でも」は「そして」と違って逆のことをつなぎます。速く泳げることは、いいことだから、からす貝よりもまっ黒なのはよくないことだと思います。
T	「ぼくが目になろう」って。どんな風に言ったのだろう。読んでみて。
※	重苦しい雰囲気を出して読む子や、大きな声で読む子など数人が音読する。
P 6	自分の嫌なことなのに、「ぼくが目になろう。」って言えるのはすごいね。
P 1	質問があります。からす貝よりもまっ黒で嫌な思いをしていたということになっているけど、はじめの文章で「たのしくらしていた」と書いてあります。スイミーはまっ黒でも楽しく暮らしていたんだから、その言葉をいうのに勇気はいらないと思うんだけど、どうですか？
全体	たしかに…
T	楽しく暮らしていたときと、「ぼくが、目になろう。」と言ったときでは、大きく違うことがあるよ。
P 7	「ぼくが、目になろう。」と言ったときに、スイミーの周りにいたのは本当の兄弟ではありません。
P 8	自分も全校朝会とかで発表するときは、いつもいっしょにいる人ばかりじゃないから緊張する。スイミーも余計に言いにくかったと思います。

子どもたちは、文や言葉にこだわって読み、短所を長所(個性)としてとらえ直したスイミーのすごさに気づくことができた。また最後のP1の質問をきっかけとして学習の理解がより深まった。授業後の感想には、スイミーのすごさの中に「自分の苦手をかくさない」が加わり、個々では見出すことのできない読みの解釈を、全体で話し合いながら見出していたことが分かる。

(3) 学習を振り返って

「スイミー」の読みの解釈を子どもたちの発達段階ごとに調査することで、教師が子どもたちに新たに会わせたいと考える読みの解釈を的確に設定することができた。それは、授業の中で子どもたちが課題を見つけ、話し合う中で「短所を長所にかえる(自分の苦手をかくさない)」という読みの解釈を見出すことができたことからうかがえる。子どもたちの事後アンケートでは、中学2年生のように、読み直すことで新たな学びがあるという内容は残念ながら書かれていなかったが、新たな読みの解釈を見出すという、よりよく読む経験をすることができた。今後このような実践を続けることで、子どもたちによりよく読もうとする態度が備わってくると考える。

4. 実践2—3年「物語をしょうかいしよう」

(「モチモチの木」 斎藤隆介作

—学校図書3年下)

(1) 授業の構想

① 単元について

本題材は、臆病で一人で雪隠に行くこともできない豆太が、大好きなじさまを助けるために医者を呼びに行き、勇気がある子どもしか見ることができないというモチモチの木に灯がともるのを見ることが出来る物語である。物語は五つの場面に分かれており、起承転結が明確で、主人公の行動描写や心情描写をもとにその変容がつかみやすい。真夜中に山道を駆け下りる豆太の行動に、子どもたちは共感しながら読み進めることであろう。また、民話調の歯切れの良い語り口やユーモラスな筆致は、読み手を物語の世界に引き込んでくれると考えた。

② 幼稚園児と中学生の読みの実態から

本実践を行うにあたり、幼稚園年長児と中学2年生を対象に、原作の大型絵本(岩崎書店)

での読み聞かせを行い、感想を調査した³⁾。

年長児は、読み聞かせの後、教師の質問に答える形で次のような感想を述べた。

- ・なぜ一人でトイレに行けないのかなと思いました。
- ・木に灯がついたのがおもしろかった。
- ・火がついたと思ったら、月が出たのがよかった。
- ・おもしろかった。あと少しで学校に行くのに、一人でトイレに行けないから。
- ・おもしろかった。木に火がついたと思ったからドキドキした。

年長児は主人公に年齢が近いせいか、まず自分と比べることによって、主人公の様子に疑問を抱いていた。また、様々な感想を「おもしろかった」という言葉で表現する傾向が見られた。全体的に、一つひとつの感想が断片的であり、物語の内容を関連づけながら表現することはできていない。中には、灯と火のとらえ間違いがあり、物語の内容が必ずしも正しく読み取れていないようだった。



図2 「モチモチの木」の読み聞かせ

中学2年生では、読み聞かせの後、物語の内容を一文でまとめさせた。主な内容は次のとおりである。(全37名)

- ・臆病な豆太が勇気を出す(医者を呼びに行く、じさまのためにがんばる)物語(12名)
- ・豆太がモチモチの木に灯がともるのを見る物語(13名)
- ・豆太が成長する(勇気ある子どもになる、強くなる)物語(2名)
- ・豆太が自分の勇気に気づく物語(2名)
- ・豆太がモチモチの木に灯がともるのを見せてくれた物語(1名)
- ・作者が「やさしささえあれば」と教える物語(1名)

また、印象に残ったこととしては、次のようなことを挙げていた。

- ・じさまのためにがんばる豆太がすてき。
- ・人は誰でも変わることができる。
- ・人は大切な誰かのためなら何でもできる。
- ・人間にとって優しさや勇気が大切。
- ・いつも見ているものが違う角度から見えるということを教えている。
- ・子どもに勇気を与えられるいい本。
- ・医者 of 分析的な言葉が効果的。
- ・最後のオチがおもしろい。

中学2年生では、物語全体を視野に入れ、主人公の変容をとらえてまとめることができていた。また、豆太の変容とモチモチの木を関連づけている生徒が多く見られた。

印象に残ったこととして、「人は～」「人間は～」のように、物語に描かれた内容を普遍的なものとして解釈している点が特徴的であった。中には、「走れメロス」と関連づけて述べている生徒もおり、既習内容や生徒のこれまでの生活経験にもとづいた感想になっていることがうかがえた。また、灯がともる原理について冷静に語る医者の言葉が、豆太の様子と対比的に用いられていることや、再び臆病な豆太に戻ってしまうおもしろさなど、表現効果に着目している生徒も見られた。

③指導にあたって

年長児、中学2年生での読みの実態をふまえて、物語を構成する要素を関連づけながら読む力を育てることをねらいとして授業を構成した。そのために、読み深めの段階では、主人公の様子と出来事とを関連づけてとらえさせることによって、主人公が変容するきっかけを読み取らせるようにした。さらに、「モチモチの木」が象徴するものから物語の主題について考えさせ、物語を自分なりに意味づけることができるようにした。そして、初読や再読の段階で物語の内容を一文でまとめさせることによって、子どもの読みの実態を把握するようにした。

④目標

○ 物語を構成する要素を関連づけながら読む力を育てることによって、物語の主題について考え、物語を自分なりに意味づけることができるようにする。

⑤学習計画（全4時間）

第1次 「モチモチの木」を読もう……1時間

第2次 豆太は勇気ある子どもになることができたのか ……2時間

第3次 物語全体を再読しよう ……1時間

（2）授業の実際

〈第1次 「モチモチの木」を読もう〉

教科書で本文を読む前に、年長児や中学2年生と同様に、原作の大型絵本での読み聞かせを行った。これまでに読んだことがある子どももたくさんいたようだが、臆病な豆太の様子に思わず吹き出したり、モチモチの木に灯がついた場面では歓声を上げたりしていた。その後、物語の内容を一文でまとめさせた。主な内容は、次のとおりである。（全32名）

- ・豆太が医者様をよびに行き、モチモチの木に灯がともっているのを見る物語（13名）
- ・豆太がじさまを助ける物語（9名）
- ・豆太が神様の祭り（モチモチの木の灯）を見る物語（6名）
- ・豆太がじさまのために勇気をふりしぼって助けたから、モチモチの木に灯がともったのを見られた物語（1名）
- ・じさまのはらいたが、モチモチの木のおかげでよくなる物語（1名）
- ・おくびょうな豆太が勇気を見つける物語（1名）
- ・神様が豆太に勇気があるとみとめた物語（1名）
- ・作者が「やさしささえあれば勇かんにになれる」と教える物語（1名）

物語の内容を大体はとらえているようであるが、出来事を羅列している子どもがほとんどで、豆太とモチモチの木とをきちんと関連づけてまとめている子どもは少なかった。また、物語の主題にかかわる内容にふれることができていた子どもは、数名であった。

心に残ったこととしては、次のようなことを挙げていた。

- ・豆太はもう五つなのに、一人でトイレに行けないところがおもしろい。
- ・豆太が一人で医者様をよびに行くところがすごい。
- ・木に灯がともるところが感動した。
- ・どんなに弱虫でも、人を助けたりできることがわかった。
- ・最後に、もとの豆太にもどるところがおもしろい。

初読の段階では、断片的な感想が多く、物語の要素を関連づけながらまとめている子どもはほとんど見られなかった。

〈第2次 豆太は勇気ある子どもになることができたのか〉

1時間目は、登場人物や主人公を確認し、豆太の人物像をとらえさせた。その中で、「臆病で弱虫な豆太は勇気ある子どもに本当に変わることができたのだろうか。」という問いが出された。そこで次の時間は、この問いについて考えることにした。

子どもたちは、臆病な豆太にもどってしまった理由として、次の内容を挙げた。

- ・じさまが助かって、安心したからもとにもどってしまった。
- ・大切な人を守るために、その時だけ本気ががんばったから勇気が出た。
- ・じさまがいなくなるとこまるから、必死で走った。
- ・勇気を大事な時のためにとっているのかもしれない。
- ・じさまが言ったように、「弱虫でもやさしけりゃ何でもできる。」

そこで、主人公の様子と出来事とを関連づけて図にまとめさせ、主人公が変容するきっかけを読み取らせるようにした。

〈第3次 物語全体を再読しよう〉

これまでの学習内容を振り返り、第1次と同じように、物語の内容を一文でまとめさせ、心に残ったことを書かせた。

- ・おくびょうな豆太がじさまのために勇気を出したので、モチモチの木に灯がとものを見ることができた物語（13名）
- ・豆太がやさしさを勇気に変えたので、勇気のあかしを見た物語（1名）
- ・豆太がモチモチの木の灯を見る物語（3名）
- ・豆太がじさまを助けるためにがんばる物語（9名）
- ・豆太がやさしさの勇気をはっきする物語（1名）
- ・じさまがはらいたを起こしてくれたおかげで、豆太が勇気を出せた物語（1名）
- ・おくびょうな豆太が勇気のある豆太に変身する物語（3名）
- ・作者が豆太をたとえにして、人間はやさしさがあれば何でもできるということを伝える物語（1名）

初読の段階に比べて、豆太の変容とモチモチの木やじさまを関連づけてまとめている子どもが増えた。また、作者の伝えたいことを自分なりにとらえてまとめている子どももいた。

学習を終えて心に残ったことや考えたこととして、次のような内容を書いていた。

- ・豆太の勇気は本物なので、これからどんなことが起きても大丈夫だと思う。
- ・ただ勇気があつて強がっているのではなく、やさしい勇気をもっている弱虫のほうが、やさしさがこもっていていいと思う。
- ・モチモチの木には、豆太のがんばりが実っているということがわかった。
- ・モチモチの木は、豆太の勇気やがんばりを知っていて、豆太の心を表している。

読み深めの中で、題名の意味について考えさせたこともあり、「モチモチの木に灯がともののは、豆太の勇気の結晶」「モチモチの木は豆太にとってのごほうび」などのように、豆太の行動とモチモチの木とを関連づけている子どもが増えた。また、じさまの「弱虫でもやさしけりゃ」の言葉を受けて、「豆太のように勇気が出せる」「がんばれば何でもできる」と、自分に引きつけて感想をまとめている子どももいた。さらに、「もしかしてじさまのはらいたはウソ？」とじさまの親心や作者の作意を読み取っている子どももいた。

（3）学習を振り返って

今回の実践では、幼稚園児や中学2年生の読み方に学ぶことによって、物語の要素を関連づけながら読むというねらいを設定することができた。その結果、主人公の様子と出来事とを関連づけたり、題名の意味を考えさせたりすることによって、「モチモチの木」が象徴しているものや物語の主題について考えさせることができた。さらに、やさしさに支えられた勇気の意味について考えを深めた子どももいた。

しかし、全体での交流の時間を十分にとることができなかったため、個人での考えにとどまってしまったところがある。今後は、全員で学び合う場を保障することによって、物語の要素を関連づけながら読む力を育てる学習を積み重ねていきたい。

5. 成果と課題

ここでは、二つの実践から、幼小期の通教科的能力の育成のあり方について考察する。

今回は、両学年ともに、幼稚園児および中学生の読みの解釈を踏まえて授業のねらいを設定して実践を試みた。

2年生では、教師が子どもたちに新たに出会わせたいと考える読みの解釈を的確に設定することができた。その結果、新たな読みの解釈を見出すという、よりよく読む経験をすることができた。

3年生では、物語の要素を関連づけながら読むというねらいを設定することができた。その結果、主人公の様子と出来事とを関連づけたり、題名の意味を考えさせたりすることによって、題名の意味や物語の主題について考えさせることができた。

このように、読みの系統性を踏まえた課題設定を通して上位学年の読みに近づく学習活動により、通教科的能力の育成に資することができたと考える。

今後は、小学校高学年や中学校での実践へと広げ、幼小中12年間を見通した通教科的能力の育成につなげていきたい。

6. おわりに

本学校園の国語科では、学習者が「言葉の世界を広げ自らの学びを探究していくこと」を目的として、「他者の言葉をとおしたかかわり合いの場」を意図的・計画的に設定した実践を積み重ねてきた。2014年度は、「学習に対する関心・意欲」を高めるための切り口として、粘り強く課題に取り組もうとする姿勢である「向上性」に着目し、読むことの領域において、「ことばのおもしろさを感じ、学ぶ楽しさをつくりだす授業づくり」に取り組んだ。今回の実践研究では、その取り組みを継続・発展させるとともに、通教科的能力との関係性を明確にするために、発達の段階に応じて「国語の運用能力」を向上させていく手立ての開発に力を注いだ。

本研究において考察対象とした「物語を読む学習指導」は、「記録、要約、説明、論述などの言語活動を行う能力」の育成を重視する立場からみれば、通教科的能力とは縁遠いものと受けとめられるかもしれない。しかし、「本のおもしろさを感じ取ること」や「物語の要素を関連づけながら読み、自分なりに意味づけることができるようになること」は、「生涯にわたって読書に親しむ態度を身につけること」や「自分の生き方について考える姿勢を身につけること」に繋がるものである。また、「多様な読みと出会い、その違いを認め合いながら、自らの読みを深めていく学習過程を実現すること」は、コミュニケーション能力や想像力の育成に寄与するものである、と位置づけることができる。

本研究において特徴的なのは、児童・生徒の読みの実態調査をもとに、「到達したい読みの姿」を具体化した点にある。また、話し合いの充実・深化を促すために、課題設定に工夫を凝らし、逆接の接続詞「でも」や「主人公が変容するきっかけ」に着目させた点にある。このように作品の本質に迫りうる「言語表現の細部」や「構成要素の関係性」に着目して意見を交わし合う機会を設定することが、言語感覚を豊かにすることに繋がるのである。さらに、ともに学びあう「場」を形成するために、「読み聞かせ」を導入して物語の世界を共有したり、「発表用ボード」等を活用して各自の意見の明確化と交流の活性化を促したりした点にも注目したい。この後、子どもたちの「物語を読む力」はどのように発達していくのであろうか。引き続き幼小中12年間を見通した研究を推進したい。

引用（参考）文献

- 1) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会：「論点整理」, 2015, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf.
- 2) レオ＝レオニ(1969)『スイミー』谷川俊太郎訳, 好学社
- 3) 斎藤隆介(1971)『モチモチの木』岩崎書店